

氏 名 (本籍地)	Sage, Kristie Jane (オーストラリア)
学 位 の 種 類	博 士 (文学)
学 位 記 番 号	甲第 88 号
学位授与年月日	2022 年 3 月 16 日
学位授与の要件	昭和女子大学学位規則第 5 条第 1 項該当
論 文 題 目	The Effects of an Input-Output-Intervention Approach on EFL Students' Use of Formulaic Sequences in Essay Writing

論文審査委員	(主査)	昭和女子大学	教授	小川 喜正
	(副査)	昭和女子大学	特任教授	金子 朝子
		昭和女子大学	教授	鈴木 博雄
		明治大学	教授	James Elwood

論 文 要 旨

当研究ではフォーカス・オン・フォーム (focus on form) とジャンル (genre) という二つの言語教授方法に基づいた英語指導方法を提案し、それが日本人英語学習者のフォーミュラー連鎖 (formulaic sequence; Wood & Siepman, 2005; Wray, 2002) とよばれる定型表現の習得に及ぼす影響を検証した。研究者自らが教える某大学の英語科目の質向上を目的とした実践研究である。フォーカス・オン・フォームとは認知作用を誘発するようなタスクの中で特定の目標言語項目に対する学習者の意識高揚を施すもので (Izumi, 2002; Long & Robinson, 1998)、ジャンルとは特定の作文形式 (例: 説得的文書 *persuasive essay*) において談話構築する際に必要な定型表現やパラグラフ・エッセイ構成に関するルールを系統立てて指導する方法である (Hyland, 2007; Swales, 1990)。英文エッセイ作成の指導を受ける学習者が、どの程度定型表現を習得し、自らの英作文において使用できるようになるかを分析した。指導において中核となる道具はテンプレート (template; Cortes, 2013; Swales 2004) と呼ばれる教員および学生が手本として参照するエッセイ構築のための雛形である。特定のパラグラフやエッセイにおける特定のセクションをまとめる上で手本となる英文サンプルや談話構築の補助となる定型表現・語句などを示すものである。説得的文書作成に有用な定型表現に対する意識高揚が今回の指導の大きなポイントとなった。

被験者として 51 名の英語を専攻する日本人大学生が研究に参加した。同じ学生グループに 2 種類のタイプの英語指導を施して、反復測定によりいずれの指導方法がより有効であるかを測定した。指導法 1 は、作文指導に先立ちインプットとして有用な定型表現を明示的に提示した。指導 2 は、それに加えて発話や作文といったタスクを通して目標言語項目を使用する機会を与えた。アウトプットを促す後者の指導方法がより効果的であろうという予測のもとで調査を行った。

指導の効果を測定するため、3 種類のタイプの客観テストを事前テスト（学期始めの第 1 週）、事後テスト（学期末の第 15 週）として実施した。テストタイプ 1 は文法的適正を見極める二者択一式テスト、テストタイプ 2 は適切な項目を選ぶ多者択一式テスト、テストタイプ 3 は穴埋め記述式テストの形を取った。テストの内容はすべて定型表現に関連したものであった。すべてのテストの点数を算出し、ANOVA あるいは対応のある t 検定で比較したところ、被験者の定型表現の知識は全体的に事前テストから事後テストにかけて有意に伸びていることが判明した。また、テスト 2 とテスト 3 の結果は、指導法 2 の方が指導法 1 に較べてより効果的であり、その差は有意であることを示した。

さらに、被験者が学期中の 2 週目、5 週目、10 週目、15 週目に書いて提出した英作文中で使った定型表現の数を数えて、4 回の英作文課題における目標定型表現の使用頻度を比較した。インプットのみによる指導法 1 はデータ不十分のため統計分析は出来なかったが、ログ尤度比検定の結果は、インプットとアウトプット誘発のためのタスクを組み合わせた指導法 2 が作文中の定型表現数増加につながることを示した。

総括的に見て、フォーカス・オン・フォームの原理に基づいて定型表現に対する学習者の意識高揚を促し、さらに特定のジャンルのエッセイ構築に必要な知識・技能習得の促進に注力するという当指導法は有益なものであるという証拠を得るに至った。研究結果はまた、テンプレートが日本人大学生に対する英作文指導において有益な道具であることも示唆した。

論文審査結果の要旨

当論文は申請者の数年にわたる大学英語指導経験とその中で繰り返し実施した試行的実験の結果に基づいて設計された実践研究である。骨子となるフォーカス・オン・フォーム (focus on form) という理論は前世代の コミュニカティブ・アプローチ (communicative approach) の弱点を補い、意味中心の言語学習タスクの中で特定の言語形式に対する学習者の意識高揚を促すもので、現在の言語教育で広く活用されている。また、語彙と文法の 2 領域だけを言語習得の基準と考えてきた従来の言語習得の考えから一歩進んだ、定型表現 (別名、フォームラー連鎖あるいは語彙フレーズ) という第 3 の領域に注目し、大学生レベルの英作文に有用と思われる定型表現を目標言語形式として選択している点も、最新の言語教育理論を十分に反映したものと考えられる。執筆者はさらに、それを特定の作文形式 (genre) に特化した指導方法に応用しており、最新理論に沿いつつも独自の応用を行った点も評価に値する。

データ収集は 1 学期全体を通して行った長期的なものであるため、その妥当性は高く、尚且つ、上に述べた通り数回におよぶ試行的実験を繰り返した上で最終的に使用するデータ得ている点で、現実的な言語指導を反映したものと考えられる。また、データ分析に関してもテストの点数を信頼度の高いラッシュ値に転換した後で、ANOVA や t 検定といった統計処理を行っている。定型表現習得を測るテストに関しては、難易度の違う三つの違った種類の客観テストを用いて測定を実施することにより、妥当性と信頼性を高めている。加えて、学生が学期中に作成した数回のエッセイの中で使用されている定型表現の数を比較することにより、言語産出のレベルでの能力向上度も分析している。客観テストの三つのセクションのうち二つにおいては、あいにくグループ間の事前テストの点数差が有意であったため ANOVA を断念して、t 検定で点数の伸びを比較するという簡単な分析に終わってしまった残念なところもあったが、データ収集・分析に関しては終始適格な手順を踏んでいる。

先行研究などまだ改善の余地のある部分もあり、課題も少なからず残されているが、大学における英語教育現場のニーズに沿った有益な長期的研究である。実践研究の主目的であった自身の授業改善にとどまらず、同系列の授業を担当する他の英語教師にとって参考となる貴重なヒントを数多く提供している。また言語教育における当分野の知識に資するところがあると考えられる。よって、審査委員会は全員一致で申請者は本論文による博士 (文学) の学位授与に値すると判定した。